

巻頭言

科学社会学会の設立へ向けて

松本三和夫*

本年12月1日、科学社会学会の設立大会が開かれる。科学社会学の萌芽は、理論社会学者のR. K. マートン (R. M. Merton) が博士論文「17世紀イングランドにおける科学、技術、社会」をハーバード大学に提出した、1930年代に遡る。由来およそ80年間、日本では科学社会学の専門学会は存在してこなかった。国際的には、アメリカ社会学会に所属した社会学者のなかから科学技術に関心をよせる者が自発的につくった研究グループがもとになり、1975年に科学の社会研究学会 (Society for the Social Studies of Science) が設立される。

日本では、1988年に本誌の刊行母体である科学・技術と社会の会 (Japan Association for Science, Technology & Society 略称 JASTS) が、自発的な研究グループをもとに設立される。本誌は、それをもとに、1992年に創刊された (本誌第20巻巻頭言を参照)。

*

奇しくも、創刊20周年を迎えた昨年、東日本大震災・福島第一原発事故に遭遇する。同事故は、これまでの学問と社会のあり方に根本的な問題を提起している。本誌を場に展開する学術活動が、あと知恵を利することなく、これまでの学問と社会のあり方の変革につながる成果を生み続けることを願っている。

本誌のこれまでの歩みは、文化事業として長年活動を支えてくださった出版社に負うところが大きい。しかしながら、昨今の学術出版を取り巻く厳しい情勢のもと、より自立的に学術発表活動を展開する体制を整え、次世代の研究基盤を立ち上げることが必要になってきた。これまで20余年続けてきた、個人として科学・技術と社会の会を主宰し、本誌の責任編集者としての役割を担ってきた責任編集体制から、個人の手をはなれても本誌が学会を母体に自立的に拡充、発展できるよう適宜制度

* Miwao Matsumoto (東京大学)

化するにいたったゆえんである。

*

科学社会学には、研究現場の実感を開陳しあう営みの謂という古典的な誤解が存在する。たとえば、科学者集団のゴシップ語りに興じることと科学社会学とは、おのずと趣を異にする。はたして、ゴシップ語りをこえる、相当程度に豊かな理論的、実証的研究が蓄積されて久しい。その内容を踏襲して発展させるにせよ、批判してのりこえるにせよ、研究前線の根柢をきちんとふまえ、ささやかでも、次世代の学問を切り開く闊達な学術プラットフォームができるとすれば、なによりうれしい。

さらに、学問と社会の界面（インターフェイス）に視野を広げると、国の政策でも、それ以外の事柄でも、既定の方針に沿うかぎりにおいて学問を言挙げするといった風潮が少なからず見受けられる。あるいは、わかりやすさと短期的な有用性の尺度だけで学問を評価し、それに応じて予算を配分する風潮も。ともに、遠からず反知性主義につながる可能性をもつと思う。科学社会学会が、そうした風潮も含めて批判的に議論できる万人のフォーラムの役割も果たすことができれば幸いである。

長い間本誌を支えてくださったすべてのみなさまに感謝の意を表したい。そして、新たに科学社会学会の発起人となってくださったみなさま、これから投稿して下さる未来の学会員のみなさま、学会に関与していただける広汎なみなさまの参加と、新たな学会へのご支援を切にお願いする次第である。